

聖書:ルカの福音書20章1~8節

聖書:何の権威によって

はじめに

人々の大歓声によって迎えられながら、イエスは子ろばの背中に乗ってエルサレムに入れ、すぐに神殿に向かいます。そこには、異国で暮らす人たちがユダヤの通貨で献金ができるようにと両替人がいました。また、罪のきよめのために鳩を献げるようにと律法に書かれているので、鳩を持って来られない人たちのために鳩を売る人たちもいた。欲しいものがすぐに手に入るのですから、今で言えばコンビニのようなもので非常に便利。しかしイエスの目には違って見えました。神殿は祈りの家でなければならない。けれども、あなたがたは心の中にあるものは見ようとせず、ただ形だけ立派に整えればよいと考えて礼拝しようとする。それは強盗の巣と同じである。そうやってイエスは商売人を神殿の外に追い出してしまうのです。

## 1 祭司長たち

### 1) 殺そうと狙っていた

これだけ乱暴なことをしたからには、ただで済むはずがありません。当然腹を立てた人たちがいる。今日登場する祭司長、律法学者、長老たちです。かれらこそ、権威を持ってこの神殿を管理している人たち。この人たちの許可がなければ商売はできません。両替人も鳩売りも、皆彼らが許可をしたからいたわけですから。こんな場合、ただで許可することはできない。きちんと場所代を徴収する。自分たちの懐に入れていたとまでは言いませんが、神殿を商売の道具にしていたのは確かです。ところがイエスは自分たちの許可を取らずに商売人を追い出した。このままでは神殿の経営も立ちゆかなくなる。なんととっても自分たちのメンツが丸つぶれになったことに腹を立て、なんとかしてイエスを殺そうと相談を始めるのです。

### 2) 宮で教えるイエス

神殿の中で大立ち回りを働いたのですからただで済むわけではない。ところがイエスは逃げずに、神殿のなかで堂々と人々を教えていた。祭司長たちに見ればまるで馬鹿にされているように見える。ますます腹を立てて、一刻もはやく息の根を止めたい。しかしそれができない。イエスの周りに大勢の人たちが集まり、熱心にイエスが語り、ことばに耳を傾けているのです。そんなときに、皆

のいる前でイエスを逮捕しようものなら暴動が起きて自分たちのほうが危なくなる。それで手が出せないでいた。

### 3) 何の権威で

とは言えこのまま手をこまねているわけにはいかない。そこで考えた。皆の目撃している前でイエスに大恥をかかせ、人々の心がイエスから離れるようにしよう。そこで人々が集まっている目の前でこう質問した。2節。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくださいませんか。」

あなたはだれの許可をもらって神殿から商売人を追い出し、人々に教えているのか。だれがそんなことを許可したのか。そういう質問です。祭司長たちの魂胆はこうです。もちろんイエスに許可を出した人間なんかいるはずない。なぜなら、宮の管理一切を任されているのが自分たちだから。イエスは何も答えられなくて人々の前で大恥をかくだろう。そう考えた。

## 2 ヨハネのバプテスマ

### 1) 天からか、人からか

イエスはどうされたか。3, 4節。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」

ヨハネとは洗礼者ヨハネのこと。彼はヨルダン川のほとりにたつて罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝え、これを聞いて罪を悔いる者にヨルダン川の水でバプテスマを授けました。そのヨハネは、やがてヘロデ王の怒りに触れて獄につながれ、首を切られて殉教していったことは皆さんもご存じのとおりです。

イエスはそのヨハネのことを取り上げて、ヨハネがしたバプテスマは天から来たのか、すなわち神からの権威によって行ったものなのか、それとも人から、すなわちヨハネが勝手に行ったことなのか、答えなさいと逆に質問します。イエスがご自分を守るために思いつきでこんなことを持ち出したのか。もちろんそんなことはない。むしろ祭司長たちの質問に積極的に答えるために、その前準備としてこう尋ねたのでした。

## 2) 「知りません」

ポイントはこうです。周りにいる群衆は、「ヨハネは預言者だと確信して」いた。けれども、祭司長たちはヨハネを預言者だとは認めず、ヨハネからバプテスマを受けようとしなかった。イエスはそこに注目します。人々の気持ちがだんだんイエスに向かってゆき、イスラエルの王になるのではないかと期待も高まっています。祭司長たちは歯がゆい思いで眺めているだけ。なんとか人々の心を自分たちの方へ引きつけ、味方にしたいとの一心です。とは言え、祭司長たちはヨハネを預言者と認めない立場です。でもそのことをここで正直に「人から」と言って答えたなら、群衆は怒って石を投げつけるに決まっている。さりとて、「天から」と答えたなら、ヨハネからバプテスマを受けていないのですから自分たちの矛盾は明らか。墓穴を掘るだけ。どう答えるべきかと、しばらく相談した結果、「どこから来たのか知りません」と答えた。

よく国会中継のテレビを見ていると、自分にとって都合が悪い質問があったりすると、「ご質問のことに記憶ございません」と答えることがあります。そんな答えをそのまま信じる人はだれもいない。覚えているけれど本当のことを言ったら自分の立場が悪くなるので、だれも証明できないことばで言い逃れをする。実に頭がいいと思います。祭司長たちはこの方法を使った。

## 3 イエス

### 1) なぜヨハネのバプテスマを持ち出すのか

これを聞いたイエス。8節。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

このやりとりを皆さんどう思われるでしょうか。二つの意見があるでしょう。一つ目。「イエスを罠にかけようとしてきたのだから、祭司長たちにまともに答える必要がない。これで問題ない。」二つ目。「いや、せっかくのよい機会だから、別に隠す必要はなかった。権威は神からですと答えれば他の人たちも聞いているのだし、この際ははっきりすべきだ。」

おそらくこの二つのどちらでもありません。もし最初から答える必要がないと思われていたのなら、すぐに8節のことばを言えばよいのです。また、「神からの権威でやっています」と答えようと最初から考えておられたのなら、これも同じくヨハネのことを持ち出さなければはっきり言えばよいだけ。ということで、イエスがわざわざヨハネの

バプテスマを持ち出すのには何か大切な意図があることになります。

### 2) バプテスマはどこから来たのか

ヒントは4節です。「ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」短いことばですが、祭司長たちも困ってしまつて「知りません」と答えるしかなかったほど、まるで刃のような鋭い質問でした。

ヨハネは人々にバプテスマを授ける時、なんと書いていたでしょう。ルカの福音書3章16節です。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。」

ヨハネが授けていたバプテスマは、そこで終わるのではない。次に来られる方につながっている。今はヨルダン川の水でバプテスマを授けているけれど、後に来られる方は聖霊と火で、バプテスマを授ける。後に来られる方とはだれか。いま目の前に立っておられるイエスです。

そうすると、「ヨハネのバプテスマはどこから来たのか」という質問、こうなるのではないですか。「ヨハネのバプテスマがもし天からものであるならば、ヨハネの後に来られる方はだれの権威によって来たことになるのか。」ヨハネの後に来られる方とはだれか。もしかして目の前にたっているイエスのことなのか。あなたがたはよく考えなさい。

祭司長たちはヨハネのバプテスマが神の権威によるものであることを絶対に認めたくありません。もし認めるなら、イエスが神の権威をもって来られたことも認めなければなりません。追いつめられた祭司長たちは、結局、白とも黒ともはっきりさせない。「どこから来たのか知らない」と答えます。

イエスは指摘しました。「おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」お前たちとは、直接には商売人ということもできますが、結局それを許可した祭司長たちがどのような信仰をもっていたのか、そこまでさかのぼる。彼らは、神のひとり子であるイエスを認めようとせず、イエスを殺したいと思っている心を隠しながら、自分たちこそ忠実な信仰者であるかのような顔をして神のひとり子に近づこうとした。そのような態度こそ、まさに「強盗」の姿だったのでした。

### 3) 罪人を救うために

話しが変わりますが、私が子どもの頃、履いていたズボンの膝がほころびて破けたりすると母親はただの真っ黒のつぎを当てて直してくれるのはいいのですが、小学校三年あたりになってくると恥ずかしく感じたことを覚えています。今なら環境に優しい生活スタイルとか言われるのでしょうか。でも、人の生き方ということになればどでしょうか。破れたところにつぎを当ててごまかすということは、いつまでも続けるわけにはいかない。

祭司長たちは一目で高い身分であることがわかるような立派な服を着ていました。しかし彼ら実際にしていることは、まるで破れたところにつぎを当てているようなみすぼらしいものにイエスは見えていたのではないか。イエスがヨハネのバプテスマを持ちだしたのは、祭司長たちに恥をかかせるためではない。破れてつぎはぎだらけの生き方をしている彼らに救いの手を差し伸べようとしていたのではないか。あなたがたが、ほころびたところを一生懸命隠そうとして、あれやこれやと言っているけれど、結局破れを大きくしているだけ。もうそんなことはやめて、自分の過ちを認めなさい。

世の中には「筋の通らないことは大嫌いだ」と言う方がいます。そんな人でも一から十まで筋が通った生き方をしているかと言えばそんなことはない。どこかに矛盾がある。それは自分でも実は分かっている。ときどき、ほころびているところがばれそうになります。そうしたらとっさに隠そうとする。言うべきことを言わなかったり、嘘をついたり、知らないふりをする。そうやっていつのまにか私たちは、イエスが言われるような強盗になっていくのです。

そんな私たちを救うために、神のもとから神の権威を帯びて来られた方が十字架につきになります。そこで、すべてが破れてほころびて、これ以上のない惨めな姿になられました。この方は、私たちの前で何も隠さず、ご自分のなかにあるものをすべてさらけ出し、見せてくださいました。この方に身を任せながらまたこの一週間を歩んでまいります。